

と超越論的態度の関係に、さらには「反省することは、反省されていないものを露わにすることである」ということに接続することとなる。

「未完成の真理や偶然性が何らかの絶対的存在と調停しうるとも、あるいは両立しうるとさえも信じなかつた」といわれるメルロ＝ポンティは、「じつのところ、彼はそれほど合理主義ではなかつた。失われた信仰への郷愁を抱いていた」とみられるメルロ＝ポンティでもあつた。「両者のはざまをこそ：」というメルロ＝ポンティであつてみれば、そのいざれでもあつたろうし、いざれでもなかつたのであろう。しかし、『告白』が、それ自身、「一への希求／自己の分裂」を図式とする祈りであるとすれば、哲学を「ちまたに身を置く」ととするメルロ＝ポンティもまた祈りに無縁ではない。

創世記二二章における地名モリヤの文学的機能

岩寄 大悟

創世記二二章一一九節（以下創世記二二章）において、アブラハムは神から息子イサクを全焼の犠牲にささげるよう命じられ、「モリヤの地」へと旅をする。この「モリヤ」という地名は、創世記二二・二以外では歴代誌下三・一に言及されるのみである。しかも、創世記二二章では「モリヤの地」であり、歴代誌では「モリヤ山」となつている。創世記二二章と歴代誌の関係および歴代誌が指示するエルサレムと創世記二二章の関係についてさまざまな見解が出されてきた。また、創世記二二章のモリヤを後代の変更と見做し、モリヤという地名の元

來のテクストを探る研究も多くなされてきた。本発表では、まず創世記二二章のモリヤが古代語訳において、どのように訳されているかを確認し、次にエルサレムと創世記二二章の関係を、最後にモリヤという地名が創世記二二章においてどのように機能を有しているのかを検討した。

まず、主要な古代語訳について検討を行つた。古代語訳において、「モリヤ」をそのまま音写する古代訳はきわめて少なく、ウルガタ、アクイラ、シュンマコスの諸訳はモリヤを「見る」として解釈しているようであり、タルグムのうち、オンケロスと偽ヨナタンは「畏れる」をもとに訳していると考えられる。これらを考慮すれば、ごく一部を除く、多くの古代語訳では、モリヤを地名としてではなく、単語として翻訳したと考える方が適切である。

次に、創世記二二章のモリヤを歴代誌との関連からエルサレムと同定することについて検討した。聖書学者の多くが両者を同一視できないと判断していた。しかしながら、モリヤという地名がヘブライ語聖書に一度しか登場せず、両者から提供される情報もあまりにも少ないため、創世記二二章と歴代誌下三章の両者におけるモリヤがいかなる関係にあるのかは明らかではなく、また、一方が他方に依拠するのか、あるいはまったく別の伝承を受け継いでいるのかなどについては推測の域を出ない。そのため、モリヤという地名を歴代誌下三章およびエルサレムに関連するのか否かということについては、多くの困難に直面せざるをえず、したがつてモリヤという地名の位置も結局不明瞭なものとなる。

さらに、現代の読者に創世記二二章の「モリヤ」がどのように機能を果たしているかを考察した。その結果、創世記二二章において地名モリヤは、きわめて技巧的な語呂合わせを形成し、しかもそれによって創世記二二章の「見る」と「畏れる」という混乱／混同をまとめる機能を有している。さらに、アブラハムの生涯においてきわめて重要な物語を特別な場所で行われたとして創世記二二章の記事を特別視させる一方で、同時にこのモリヤの意味がまったく意味が不確かであるので、全く虚構の地名だとも考えさせ、さらには物語の記事の内容を疑わせるという、文学的機能を有している。

以上、古代語訳および、創世記二二章と歴代誌の記述やエルサレムとの関係について確認し、それらをもとに文学的機能について考察してきた。創世記二二章において重要な動詞である「見る」や「畏れる」とモリヤとの間に、発音上の類似が存在し、それらが巧みな言葉遊びを形成していた。その結果、創世記二二章の重要な語句を統合させる機能を有していた。さらに、物語を特別な場所で行われたものにすることで、創世記二二章の記事を特別なものにする一方、創世記二二章において重要な場面設定であるはずのモリヤの位置や意味が不明瞭で曖昧なため、結果的に物語の内容にも疑問を抱かせる機能をも有している。このように、創世記二二章において地名モリヤはきわめて重要で多様な文学的機能を有しており、現代の読者はこの地名モリヤによって、単なる場面設定や位置の確定に留まらない大きな影響を、創世記二二章の読みに受けているのである。

語られた言葉と書かれた言葉 ——ブーバーのサムエル記解釈より——

堀川 敏寛

聖書言語の言語性を主題とする際、それはわれわれの手元に存する書物としての所与の「書かれた言葉」に限定され得ない。聖書には、聖なる存在である神によって「語られた言葉」が含まれ、それは預言者を通して人間世界に伝達されたものである。マルティン・ブーバーは、『サムエルとアガク』（一九六〇）の中で、自らの生の様式一切を敬虔な伝統に従わせる律法に忠実なユダヤ人との対話について報告している。話の主題は、サウル王が外敵であるアマレク人の王アガクを殺さずに見逃したという理由で、預言者サムエルが「サウルの王国支配は奪い去られるであろう」という神の使信を伝達したサムエル記上十五章であった。この律法に忠実な男は、聖書テクストにおいて書かれた内容を、字義通りに理解した。つまり神が異教徒の王を殺すよう命じたことを、疑いなく信じた。他方、ブーバーは「これが神の使信であると、私は決して信じることができませんでした。……私はサムエルが神を誤解したのだ信じます」と、聖書テクストそれ自体が既に誤つて伝達されている可能性がある、と考えた。

ブーバーは、このサムエル記上の解釈をもとに、神の捉と人間の規則との混同、神の声とそれをおこす人間の筆との食い違い、受け入れられた声と作られたテクストとのずれから誤解が生じる可能性があると考える。更に彼は「われわれは理解と誤解とを分離、区別するいかなる客観的基準も持ち合わせない。